

長秋詠藻 上

久安之比崇徳院に百首歌めし、時、奉りし歌
春歌廿首

1 春來ぬと空にしるきは春日山峯の朝日の気色なりけり

【題意】『長秋詠藻』上巻。久安の頃、崇徳院が百首歌をお召しになった時、詠んで奉った歌。春の歌、二十首の意。「久安……奉りし歌」は、この百首歌全体をさし、「春歌廿首」が、1番歌から20番歌までの二十首分の題である。

【歌意】春が来たと空に著しくわかるのは、春日山の峰にさしてくる朝日の様子によってであったなあ。

【語釈】◇久安の頃崇徳院に百首歌めし、時、奉りし歌 「久安」は、天養二年（一一四五）七月二十二日に久安と改元してから久安七年（一一五二）一月二十六日に仁平と改元するまでの七年間の年号。「崇徳院」は、第七十五代崇徳天皇（一一一九―一一六四、五十六歳）の譲位後の呼称。諱は顯仁。在位は、保安四年（一一二三）二月十九日より永治元年（一一四一）十二月七日の十九年間で、五歳より二十三歳までの間にあたる。「百首歌」は、崇徳院が当時の歌人達に詠進させたいいわゆる『久安百首』。

『久安百首』は、『久安六年御百首』（群書類従本）あるいは『崇徳院御百首』（新編国歌大観本）と呼ばれる作品で、群書類従本の題の注記に「是第二度也初度者題同堀川百首」とあり、同奥書に

本云
康治之比賜_レ題。久安六年各詠進畢。

仁平三年暮秋之比。依_二別御気色_一部類畢。左京大夫顯広。

此百首。先人乍_レ置_二数輩上臆_一。奉_レ仰部類。一度奏覽之後。隆季朝臣進上歌可_二切入_一之由被_レ仰。返給之間。有_二保元事_一不_レ能_二奏覽_一。(以下略)

とあり(「顯広」「先人」は共に俊成をさす)、また、俊成晩年の書『正治奏状』に、

崇徳院の百首のたび、公能の右大臣三十の齡にて候き。この老入道、位のかずならぬ非人にて候しかども、また三十の齡にてはじめのとしの中にまかり入りて候き。その年の初めには、御製の外十三人、公行・公能・行宗・教長・顯輔等の卿、忠盛、又、親隆等の朝臣、僧覺雅、老入道、女房堀川・兵衛・安芸・小大進、これらにはそのたび講ぜらる、事遅く候しほどに、公行・行宗・覺雅三人まかりかくれ候にしかはりに加はり候し三人、隆季・清輔・実清これらに候。(久松潜一氏編校『歌論集 一』〈三弥井書店、昭和四十六・二〉所収の『正治二年俊成卿和字奏状』による。「女房堀川」は「待賢門院堀河」。以下、「堀川」は全て「堀河」に統一して表記したい)

と記述されてあるのによって、おおよその成立事情が知られる。崇徳院によって企図された二度目の百首歌で、康治二年(一一四三)頃に題が下賜され、最初、藤原公行・同公能・同行宗・同教長・同顯輔・平忠盛・藤原親隆・僧覺雅・老入道つまり俊成・待賢門院堀河・上西門院兵衛・待賢門院安芸・小大進の十三人が詠作者として召されたが、途中、公行・行宗・覺雅の三人が没し、新たに藤原隆季(実は季通)・同清輔・同実清の三人が加えられ、崇徳院自身も百首を詠んでいるので、結局十四人の作者によって出来た作品である。一応の完成は書名になっている久安六年(一一五〇)であり、この年崇徳院に奏覽された。康治二年に題が下賜されたとして、俊成の三十歳から三十七歳の年にあたる。この後、仁平初年(一一五二)に、俊成が、数輩の上臆をさしおいて全歌を部類するようにとの命を受け(俊成より年輩の歌人に、『詞花集』の撰者顯輔を筆頭にして藤原清輔・同親隆・同教長らがいたへただし、清輔

は後の差し替えの作者)。平忠盛は俊成よりも年齢は上だが武家歌人。藤原公能は俊成より一歳年下ではあったが正二位参議で身分的には上臆であった)、仁平二年頃に部類を終えて奏覽したが、しかし、その翌年詠作者の一人忠盛が没したので、新たに藤原隆季が加えられ、その隆季の百首を忠盛の百首と差し替え、部類したものの中に加え、仁平三年(一一五三)暮秋の頃完成した。この再度部類した百首歌が、保元の乱の勃発によって崇徳院に進上はできなかったものの、現存する部類本の最終形態である。俊成にとつては、百首歌の作者の一人に指名され、さらに全歌部類の下命を受けたわけで、優れた歌人として認められたことを確信したに違いない記念碑的な作品であった。なお、『久安百首』の成立については、『谷山氏・藤原俊成』『谷山氏・千載集とその周辺』、『谷山氏・平家の歌人たち』、『松野氏・俊成の研究』、『久保田氏・新古今歌人の研究』、『久安・校本と研究』、井上宗雄氏「詞花集をめぐる歌壇―久安百首などを中心に―」(平安朝文学研究、昭和三十五・四)、橋本不美男氏「久安六年御百首」(『群書解題』第七卷、続群書類従完成会、昭和三十五・十二)、兼築信行氏「藤原定家の家集編纂意識―建久期良経家歌壇と『拾遺愚草』―」(国文学研究、平成五・三)参照。◇春來ぬと 春が來たと。「ぬ」は完了の意を表す助動詞。◇空にしるきは「しるき」は他からきわだっているさま、著しいさまを表す形容詞「しるし」の連体形。式子内親王の歌に、「春も先づしるくみゆるは音羽山峰の雪より出づる日の色」(式子内親王集・一)という作がある(傍線筆者、以下、ことわらないものは全て同じ)。◇春日山 大和国の歌枕。現在の奈良県奈良市春日野町、春日大社の後方にひかえる山。若草山の南に位置し、御笠山・長尾峰など五峰より成る。「冬過ぎて春來るらし朝日さす春日の山に霞たなびく(万葉集・卷第十秋雜歌・一八四四・作者未詳)。◇気色 様子。人間・自然・事物などの外面の様子、また外見から受ける感じという語。けはい。

【評】「部類本」「春歌上・立春」(九)。

百首歌の巻頭歌としての立春詠。迎春の喜びを詠んだ歌。

迎春を言祝ぐ場所として「春日山」が選ばれていることと、春の兆しを証明するものとして「峯の朝日の気色」が詠まれていることに注目せられる。春日山は、その裾野に藤原氏の氏神である春日大社が鎮座する地であり、和歌では藤原氏を暗示するように詠まれることが多い。例えば、「峰高き春日の山に出づる日はくもる時なく照らすべらなり」（古今集・巻第七賀歌・三六四・藤原因香）という歌などがその典型。この歌は醍醐天皇と藤原穩子との間に皇子が生まれたときに詠まれたもので、「春日の山」で藤原氏を、「出づる日」で生まれた皇子を暗示する。俊成の遠祖は御堂関白藤原道長の六男御子左大納言長家にあたる。その子忠家は大納言、さらにその子俊忠つまり俊成の父も中納言に至ったが、五十三歳（または五十一歳）で亡くなってしまった（尊卑分脈・公卿補任）。その時俊成はわずかに十歳であり、以後の彼の官位昇進の道は閉ざされたかたちになった。姉の嫁ぎ先葉室頭頼の養子となり、十四歳で叙爵し官界に身を投じるが、この「久安百首」詠進時の三十七歳には、未だ正五位下丹後守に甘んじていた。衰えた家柄とはいえ藤原氏北家に連なる俊成が、百首歌の巻頭に春日山を置いたことは意味深いといえよう。

「峯の朝日の気色」によって春の兆しを示したことについては、当時の歌人たちが空の気色に強い関心を持っていたことと深く関係するであろう。「ほのほのと春こそ空にきにけらし天のかぐ山霞たなびく」（新古今集・巻第一春歌上・二・後鳥羽院）や、「春霞かすみし空の名残りさへ今日を限りの別なりけり」（新古今集・巻第八哀傷歌・七六六・藤原良経）などが注目でき、時代は下るが『徒然草』に、「この世のほだし持たらぬ身に、たゞ空の名残りのみぞ惜しき」（新古典大系本・二十段）と、「空の名残」に執着した僧の話が紹介されている段がある。『新編国歌大観』第一巻の索引によって八代集および『新勅撰集』を検索してみても、「あかつきのそら」（千載1・新古今1）、「あけがたのそら」（千載1・新古今3・新勅撰4）、「あけほののそら」（金葉1・千載2・新古今4・新勅撰2）、「ありあけのそら」（詞花1・千載4・新古今1・新勅撰4）、「くれがたのそら」（千載1）、「はるの（み）そら」（金葉1・千載1・新古今1・新勅撰1）、「ゆふぐれのそら」（千載5・新古今11・新勅撰2）、「そらのけしき」（新古今2・新

勅撰2）などが拾い出せる。また、空が冴えると詠むもの（千載2・新勅撰1）、空が匂うと詠むもの（千載1・新古今1）、空が澄むと詠むもの（新古今2）などもあり、この時代になっていろいろな空の気色にかかわるものが詠まれてきていることがわかる。俊成はそうした時代の雰囲気を取り込むかたちで、春日山の峰に朝日のさす空の気色に敏感に反応した立春詠をなしたといつてよい。『木船氏・久安全釈』は、「本歌・本説・証歌」の項に、「春立つといはせもはてず朝まだき風のけしきぞまづかはりける」（堀河百首・立春・六・頭仲）をあげている。錦仁氏『式子内親王全歌集』（桜楓社、昭和五十七・十）は、一番歌（前引の式子内親王歌）の頭注に、俊成歌とともに藤原定家の「久方の雲居はるかに出づる日のけしきもしるき春は来にけり」（拾遺愚草・七〇一）を参考としてあげている。式子歌は、詠作における発想の仕方・一首全体の構成ともに俊成当該歌に類似する点が多く、俊成歌の受容のもとに詠まれたものであることがよくわかる。ただし、俊成歌が春が先ず越えて来るといふ京都の東に位置する音羽山ではなく、奈良の春日山を詠み込んでいるところに、内親王とは異なる俊成における藤原氏への帰属意識を読みとるべきである。

『続拾遺集』（巻第一春歌上・三・詞書「久安六年崇徳院に百首歌奉りける時、春のはじめの歌」、初句「春たつと」）に入集。

2 続後 霞立ち雪も消えぬやみ吉野のみかきが原に若菜摘みてむ

【歌意】 春霞が立って、雪も消えたよ。さあ、吉野のみかきが原で若菜を摘もう。

【語釈】 ◇続後 『続後撰集』または『続後拾遺集』に入集していることを示す集付であるが、後述するとおり『続